

いきいき

家畜衛生ネット

第

154

号

2026年 春



高松農業高等学校の子豚

～ 衛 生 情 報 ～

- 家さんの飼養衛生管理基準における大臣指定地域が指定されました
- アフリカ豚熱(ASF)の現状と対策
- 損失を防ぐためのワクチン対策
～牛異常産ワクチン、まだなら今すぐ接種を～

～ そ の 他 ～

- 堆肥化を安定させて臭気を抑制しましょう!
- 家畜保健衛生所の職員を紹介します!



岡山県マスコット
「ももっち」

<連絡先電話番号>

農林水産部畜産課 : 086-226-7431

岡山家畜保健衛生所 : 086-724-3880

井笠家畜保健衛生所 : 0866-84-8221

高梁家畜保健衛生所 : 0866-22-2077

津山家畜保健衛生所 : 0868-29-0040

農林水産総合センター 畜産研究所 : 0867-27-3321

記事を
掲載しています

《発行》岡山県農林水産部畜産課

<https://www.pref.okayama.jp/page/detail-26074.html>



家きんの飼養衛生管理基準における 大臣指定地域が指定されました

大臣指定地域とは、高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の発生リスクが高いと判断された地域のことです。2024年シーズンの過去発生農場での再発や家きん農場集中地域での連続発生を受け、令和8年1月1日から新たに大臣指定地域が設けられました。今シーズンのHPAIの発生状況を振り返り、来シーズンに向けて大臣指定地域における新たな対策を確認しましょう。

農場での発生状況

今シーズンは、本県での発生も含め、2026年4月8日時点では15道府県23農場で発生し、約552万羽の殺処分となりました（図1）。2024年シーズンと比べると事例数は減少しましたが、今シーズンも過去に発生があった農場での発生が多く、現在わかっているだけで23農場中8農場に上ります。また、今シーズン発生した農場は、周辺に水場・カラスの溜まり場があることが特徴的でした。

野鳥等での発生状況

野鳥及び環境試料では、2026年4月8日時点で151検体からHPAIウイルスが検出されました（図1）。例年通り、湿地や水辺をねぐらとするツル（タンチョウ）、ハクチョウ、カモに加え、農場への侵入リスクの高いカラスや猛禽類からも検出されています（図2）。また、野鳥での発生が多く確認されている地域では、タヌキやテン等の哺乳類からも検出されています。

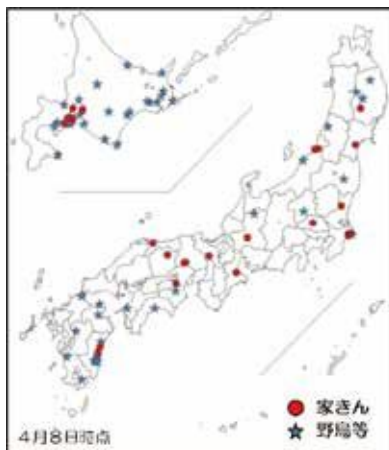


図1 2025シーズンHPAI発生状況
(農林水産省ホームページ)

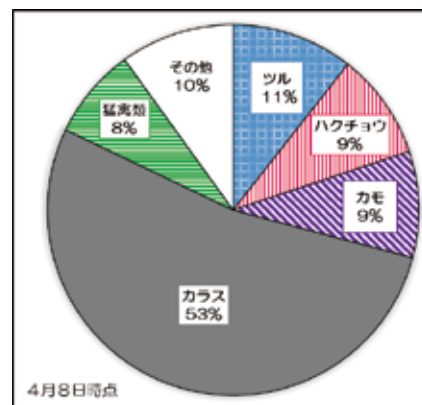


図2 野鳥等のHPAI発生状況

(農林水産省 令和7年度 国内における高病原性及び低病原性鳥インフルエンザの発生状況より集計)

大臣指定地域では新たな対策が必要です！

1 岡山県内の大臣指定地域

過去5年以内に発生した農場から半径10km圏内に別の発生農場がある区域（図3）及び半径3km圏内に10戸以上の家きん農場があり、かつ飼養羽数が合計100万羽以上の地域（図4）が大臣指定地域に選定されています。県内の大臣指定地域は下記のホームページにてご確認ください。

https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/k_shiyou/attach/pdf/index-286.pdf

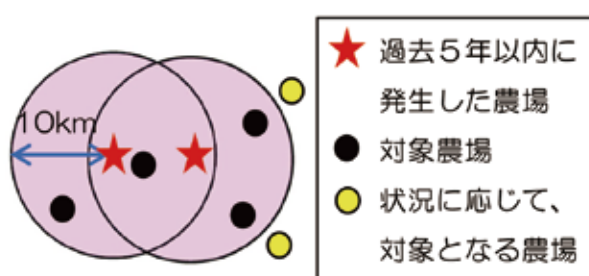


図3 複数回発生した地域（農林水産省資料）



図4 家きん農場集中地域（農林水産省資料）

2 大臣指定地域における新たな対策

飼養衛生管理基準の改正により、大臣指定地域では下記の新たな対策が必要です。国の予算により、地域内農場での消毒薬・不織布等の備蓄や野鳥対策等が条件によっては支援されることもあります。詳しくは管轄の家畜保健衛生所までご相談ください。

(1) 地域内農場での発生に対する準備

- ・消毒薬の備蓄
- ・塵埃対策の準備

(2) 野鳥の状況把握・誘引防止対策

- ・農場周辺の野鳥等の生息状況の把握
- ・農場内にある野鳥が止まるような構造物へのテグスや鳥よけの設置
- ・地域一体となった野鳥対策の検討（巣の撤去、ため池への忌避テープ等）



入気口フィルター



野生動物侵入防止壁

最後に

HPAIは大臣指定地域だけでなく、全国どこでも発生する可能性があるため、地域外の農場であっても対策を継続・強化していく必要があります。今のうちに対策に時間がかかるものから計画的に実施し、来シーズンに備えましょう。（岡山家畜保健衛生所 家畜保健衛生課）

アフリカ豚熱(ASF)の現状と対策

はじめに

アフリカ豚熱(ASF)とは、アフリカ豚熱ウイルス(ASFV)によって発症する豚とイノシシの伝染病です。豚熱(CSF)と名前や症状は似ていますが、異なる種類のウイルスによる伝染病で、国内では本病の発生はこれまでのところ確認されていません。

甚急性、急性、亜急性、慢性と症状は多岐にわたり、甚急性では突然の死亡、急性では発熱(40～42℃)、元気消失(写真1)、耳翼の紅斑などの皮下出血(写真2)、脾臓の腫大、粘血便や下痢(写真3)、チアノーゼ等を呈します。人には感染しませんが、ASFVに感染した豚やイノシシは、ほぼ100%死亡します。

伝播経路はCSFと同じで、感染(死亡)した豚、イノシシへの接触やウイルスに汚染された肉製品(加熱処理が不十分な飼料等も含む)によって広がります。有効なワクチンはなく、日本へ侵入し感染が拡大した場合には、CSFとは比較にならない損害が発生する可能性があります。



写真1 元気消失



写真2 耳翼の紅斑



写真3 下痢

(出典 農研機構動物衛生研究部門)

ASFの世界的な広がり

ASFVは、もともとアフリカでイボイノシシなどの野生動物とダニの間で保有されていました。ところが、2007年にヨーロッパとアジアの境にあるジョージアに侵入後、ロシアやヨーロッパ、そして東アジアへと急速に感染が広がりました(図1)。

感染の急拡大は、野生イノシシによるもののほか、清浄国への汚染肉製品の違法な持ち込みが原因と考えられています。2025年10月にはこれまで発生の無かった台湾の養豚場で確認され、韓国では2026年1月以降、養豚場での発生が急増しており、日本への侵入リスクは高まっています。



図1 海外のASF感染国と経路

(出典 農林水産省 HP)

ASFへの対策

1 国内にASFVを侵入させない

我が国では海外からの肉製品の違法な持ち込みに対し、検疫官の権限の拡大や増員、罰則強化や検疫検知犬の配置などにより、検疫体制の強化を図っています。また、国際空港などでは消毒マットの設置による靴底消毒の実施や、海外からの肉製品持ち込み禁止キャンペーンを行い、周知を行っています(写真4)。



写真4 家保職員も参加した岡山桃太郎空港でのキャンペーンの様子

岡山県でも、岡山桃太郎空港の国内便、水島港に消毒マットを設置しています。

農場においては、従業員や関係者が海外の肉製品を持ち込むことのないよう、周知をお願いします。

2 農場の防疫対策の強化

ASFとCSFの感染経路は同じですので、CSFワクチン接種以外で現在取り組んでいただいているCSF対策がASF対策となります。飼養衛生管理基準を遵守し、農場にウイルスを侵入させないように、これまでの対策を維持強化してください。

3 ASFの感染を拡大させない

国は、野生イノシシでASF感染が確認された場合の防疫方針を定めています。

方針では、感染確認地点からウイルスを拡散させないために、歩行者を含めた消毒ポイントの設置、3km圏内の死体の搜索や電気柵の設置、その周辺での捕獲強化などの対策を求めています(図2)。

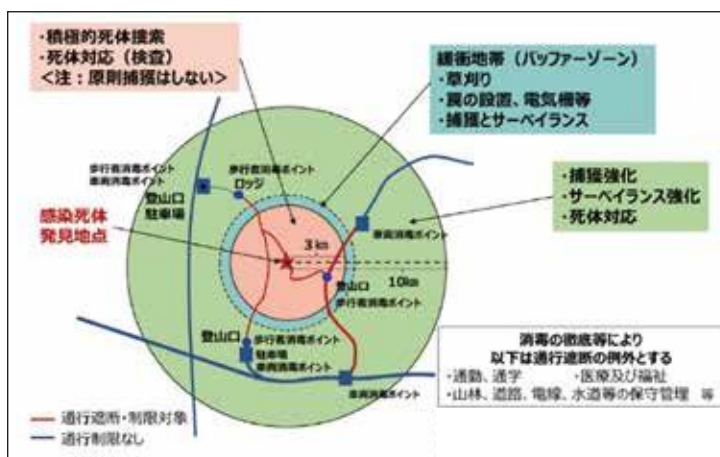


図2 アフリカ豚熱が野生イノシシで確認された際の防疫対応の実施内容と範囲 (出典 農林水産省 HP)

最後に

中国では、ASFの発生による死亡や殺処分で、豚肉生産量が4割減少したといわれています。ASFの国内まん延は、養豚業に大きな損害を与えるだけでなく、国民に広く、多大な影響を及ぼすこととなります。また、2025年11月にはスペインでのASF発生を受けたスペイン産豚肉の一時輸入停止がニュースになりました。

海外でのASF発生情報に注視していただくとともに、引き続き飼養衛生管理の向上に努めてください。

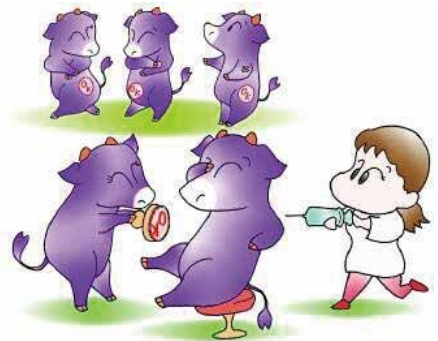
(高梁家畜保健衛生所)

損失を防ぐためのワクチン対策

～牛異常産ワクチン、まだなら今すぐ接種を～

ワクチンで見えない損失を防ぐ

感染症対策というと治療に目が向きがちですが、実際は発症してからの対応には多くのコストと労力がかかります。診療費や薬剤費だけでなく、隔離管理の作業増加、増体停滞や乳量低下など、目に見えにくい損失も積み重なります。さらに繁殖成績の悪化や淘汰の早期化ともなれば、経営への影響は決して小さくありません。



一方でワクチンは、発症を完全に防げない場合でも症状の軽減や群内でのまん延防止の効果が期待でき、結果として治療回数の減少や作業負担の軽減につながります。これらの損失を抑え、農場の安定した生産を支える基盤となります(表1)。

表1 牛のワクチンで予防できる主な疾病

区分	主な疾病
呼吸器病	牛伝染性鼻気管炎 (IBR)、牛ウイルス性下痢 (BVD)、牛 RS ウイルス病、牛パラインフルエンザ
下痢症	牛ロタウイルス病、牛コロナウイルス病、サルモネラ症
異常産	アカバネ病、チュウザン病、アイノウイルス感染症
その他	牛クロストリジウム感染症、牛ボツリヌス症

これからの季節で注意したいのがアルボウイルスによる異常産です。異常産は母牛・子牛双方に被害をもたらす生産性が低下します(表2)。

表2 異常産の有無による損失の比較

項目	異常産発生なし	異常産発生あり
子牛	正常に出生	流産、死産、先天異常
母牛	通常回復	難産、回復遅延
繁殖	通常どおり	空胎期間の延長
生産性	安定	低下



有効な治療法はありませんが、アルボウイルスによる異常産はワクチンによって予防することができます。ただしアルボウイルスは蚊やヌカカなどの吸血昆虫によって媒介されるため、吸血昆虫が飛び始める前にワクチンを接種し、あらかじめ抗体を保有しておくことが重要です。



近年は県内においても抗体陽性事例が確認されており（前号参照）、決して油断はできません。

牛異常産ワクチンの種類と接種時期

異常産を防ぐワクチンは、アカバネ病生ワクチン、アカバネ病不活化ワクチン、牛異常産4種混合ワクチンなどがあります（表3）。アカバネ病生ワクチンは年1回接種で、アカバネ病不活化ワクチンおよび牛異常産4種混合ワクチンは、初年度は4週間隔で年2回接種、翌年以降は年1回接種します（図1）。詳しくは、一般社団法人岡山県畜産協会各支部、診療獣医師またはお近くの家畜保健衛生所へご相談ください。

表3 異常産を防ぐワクチンの例

ワクチン名	対象疾病	種類
アカバネ病生ワクチン	アカバネ病	生
アカバネ病不活化ワクチン	アカバネ病	不活化
牛異常産4種混合ワクチン	アカバネ病、チュウザン病、 アイノウイルス感染症、 ピートンウイルス感染症	不活化

※アカバネ病不活化ワクチンは令和7年10月に販売開始。

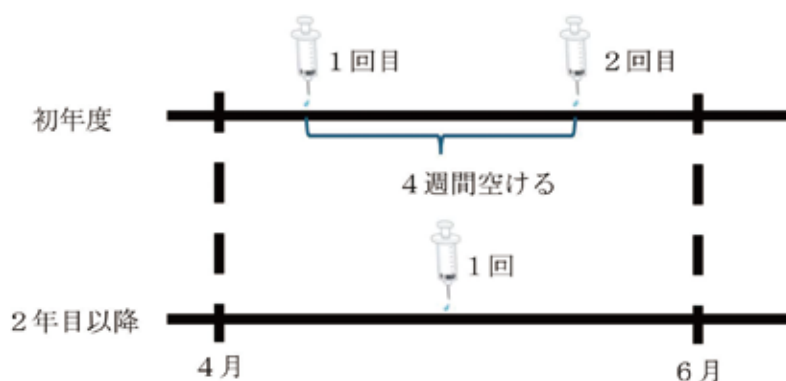


図1 アカバネ病不活化ワクチン・牛異常産4種混合ワクチンの接種時期

（津山家畜保健衛生所）

堆肥化を安定させて臭気を抑制しましょう！

春を迎えて気温が少しずつ上がってくるこの時期は、堆肥の発酵の進み具合が変わり始める時期でもあります。今回は、堆肥化の基本を振り返りながら、夏に向けて注意すべき点について「臭気対策」をテーマに整理しました。

堆肥化は微生物のはたらきによるもの

堆肥化の過程では、家畜ふん尿に含まれる有機物が微生物によって分解され、その際に発酵熱やガスが発生します。この微生物による分解が、好気条件(酸素のある状態)で進むか、嫌気条件(酸素の無い状態)で進むかによって、発生するガスが異なります(図1)。

1 好気条件(適切な堆肥化)

堆肥化の主役は好気性微生物です。好気条件による発酵により、温度は上昇します。そして、最終的に土のような臭いがする良好な堆肥が完成します。ただし、発酵の過程で窒素成分の分解に伴い、アンモニア臭が一時的に発生することがあります。アンモニア臭は良好な堆肥化の過程でみられる現象であり、必ずしも管理が不十分であることを示すものではありません。

2 嫌気条件(不適切な堆肥化)

嫌気条件になると発酵温度は上昇しません。原因は、堆肥化開始時の水分調整の失敗(水分過多)、切り返し(空気[酸素]を入れる作業)不足などにより、嫌気性微生物が働くためです。すると、堆肥化物から硫化水素やメチルメルカプタンといった強い不快臭のするガスが発生します。これらの臭気は量が少なくても強く臭うため、周辺環境への影響も大きくなりやすいとされています。また、嫌気発酵は発酵温度が上昇せず、病原微生物が死滅しないため不衛生となります。

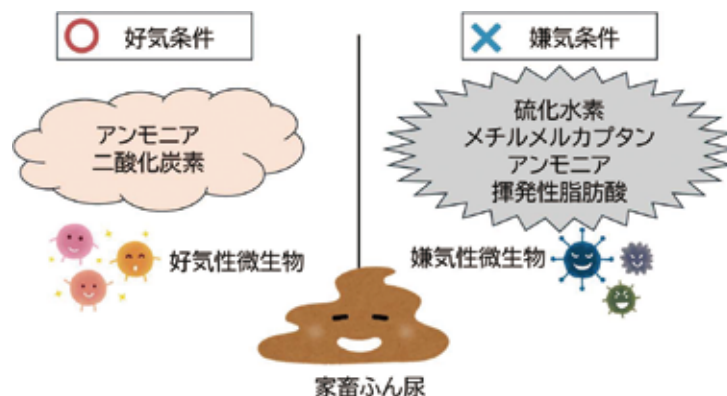


図1 好気条件と嫌気条件で発生するガスの違い

堆肥化を安定させる2つのポイント

堆肥化を好気条件で進めるためのポイントは、「水分」と「空気」の管理です。

1つ目の「水分」管理とは**堆肥化開始時の水分調整**のことで、畜種や副資材の種類にもよりますが、55%~70%(手で強く握った時に、汁はしたたらないが手のひらにかなりつく程度)になるように調整しましょう。水分が多すぎると堆肥内部に空気が入りにくくなり、嫌気条件となります。

2つ目の「空気」管理とは**通気装置の利用や攪拌装置・ホイールローダー等による切り返し**のことで、堆肥全体に十分な空気を供給するようにしましょう。切り返しは、堆肥に空気を供給し好気発酵を促進させるための重要な作業です。一方で、切り返し直後は、堆肥内部にたまっていたガスが放出され、アンモニアなどの臭気を感じやすくなります。そのため、切り返しを行う際には風向きや天候を考慮することも一つの工夫になります。例えば、住宅地側に風が吹いている場合は作業を控える、風の弱い時間帯を選ぶなどの配慮により、臭気の広がりを抑えることができます(図2)。

切り返し頻度の目安は、堆積発酵方式だと週1回~月1回程度、機械攪拌方式では1日1回程度になりますが、発酵温度や性状を確認しながら行うことが重要です。適切な堆肥化が行えていると発酵温度は上昇します。そして、発酵温度を60℃以上で2日以上維持することにより、家畜ふん尿中の病原微生物や雑草種子が死滅するため、衛生的で環境に優しい堆肥生産にもつながります。



図2 切り返しのタイミングの工夫

おわりに

堆肥化過程で感じられる臭気は、発酵により自然に生じるものもあれば、管理条件によって強くなりやすいものもあります。大切なのは、臭気が発生しているかどうかだけで判断するのではなく、堆肥がどのような状態にあるのかを観察することです。

これから、気温や湿度が高くなる季節を迎えます。日々の管理の中で堆肥化を安定させる2つのポイントを確認しながら、切り返し時などの工夫を重ねていくことが、臭気対策だけでなく安定した堆肥生産につながっていきます。(畜産研究所)